

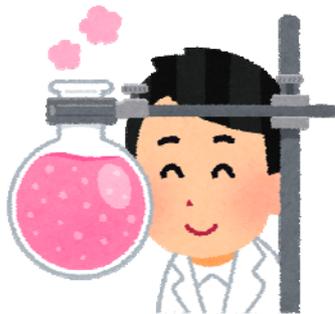
ゴルフ場から10億人を救った人物

薬局薬剤師の『薬担当者の小噺』として
医薬品の開発や薬の使い方を医療関係者の視点から情報をお伝えします



写真の像は、北里生命科学研究所前にある、オンコセルカ症で失明した大人を杖で引いて歩く子供の姿です。

エバーメクチン発見25周年を記念して、ブルキナファソ(アフリカ)に建てられている像を、現地の芸術家が再現して作成されました。



2015年10月5日、北里大学・特別荣誉教授の大村智博士に、ノーベル医学・生理学賞が送られると発表がありました。大村博士のノーベル賞受賞理由は、「寄生虫による感染症に対する新しい治療法の発見」です。今回の治験新聞では、大村博士の偉業について触れてみたいと思います。

ゴルフ場の土からエバーメクチンを発見

大村博士の数ある業績の中で一番に挙げられるのが、抗寄生虫薬「エバーメクチン」の開発への貢献です。

イベルメクチンは、大村博士が静岡県伊東市川奈のゴルフ場の土中から分離した放線菌という細菌が作る化学物質「エバーメクチン」を、動物・人間の双方に棲みつく寄生虫に効く化学物質として改良した薬です。

大村博士が放線菌から発見した化学物質が家畜の寄生虫に対して劇的な効果があることを発見し、それを抗寄生虫薬として改良したのが製薬会社(メルク)で共同研究にあたっていたウィリアム・キャンベル氏でした。キャンベル氏は、今回大村博士と共にノーベル医学・生理学賞を共同受賞しています。

製薬会社との産学連携

大学・研究機関の研究室で生まれた学術的な研究成果を、社会で役立てるため、産業界に成果を移転して実用化に貢献することを「産学連携」と言います。

大村博士の研究室で細菌から化学物質を発見し特許を取得。メルクがそれを製剤などにして実用化を図り、特許ロイヤリティ(使用料)を大村博士に支払う。その概念が日本にない時代に、それはまさに産学連携でした。イベルメクチンは元々動物の抗寄生虫薬として開発、1981年に発売され、1983年には世界の動物薬の売上高トップとなり、その後20年間その座を守っていました。やがて、人間にも効果があることがわかり、さらに多大な貢献をすることになります。この共同研究による成果で得た特許ロイヤリティ200億円以上を、恩返しとして北里研究所に還流し、新たな医薬品開発等を行っています。

社会問題、顧みられない熱帯病への貢献

「顧みられない熱帯病」とは、WHO(世界保健機関)が「人類の中で制圧しなければならぬ熱帯病」として定義している17の疾患のことを指します。

この中には、イベルメクチンが治療薬として使用されるオンコセルカ症(回虫の幼虫が目の組織に侵入し、失明や視覚障害を引き起こす)、リンパ系フィラリア(蚊に媒介されて人に感染、足が象のように腫れる象皮症を引き起こす)も含まれており、大村博士が開発したイベルメクチンは、メルクを通して80年代後半から蔓延している地域の人々に無償で提供され、現在までに延べ10億人が救われています。

なぜ、このような事が出来るのでしょうか?それは、大村博士らがイベルメクチンの商用利用で得られる特許ロイヤリティの取得を放棄して、無償で配布することに賛同したため実現したことなのです。現在では、大手製薬会社は、競ってこのような国際的貢献を行うようになってい

なかよし薬局では、地域貢献型の医療を目指して一緒に仕事をしてくれる薬剤師を募集しています!
詳しくは下記連絡先まで!

株式会社イノベーションオブメディカルサービス 厚木支社 (採用担当) 電話 : 046-220-1171

電子メール : recruit@ims-inc.co.jp

Writer: Kato Directed by: Matsuoka

